

---

# ワールド・オブ・ザ・ダイ

将軍

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ワールド・オブ・ザ・ダイ

### 【Nコード】

N9372Q

### 【作者名】

将軍

### 【あらすじ】

ロサンゼルス市警の警官4名と、犯罪者1名、暴力団員1名は突如異世界に飛ばされる。

獣神、人類、闇一族、蜥蜴一族の四大勢力がひしめく異世界で6名は戦い、学び、ふれ合いをとおしてその世界とかかわっていくことになる。

やがて、彼らはこの世界において『戦っていく』ことになるが・・・

•  
•

## 6人の消失（前書き）

お久しぶりです。將軍です！

最近、こちらのオリジナル小説のほうがさっぱりてにつかず、まったく更新していませんでしたが、これから定期的に更新したいと思っています。

今回は、正直不慣れな海外もののネタなので。銃に詳しい方などは不備に気づかれる方もあるかもしれませんが。ご了承ください。

## 6人の消失

その日、ロサンゼルスでは異常に霧が多かった。

霧の都といえばロンドンが有名だが、まさしくその日のロサンゼルスはアメリカ版霧の都といってもいいほど霧が多かった。

だが、その霧もさることながらロサンゼルス市内は異常な雰囲気支配されていた。

その原因は2日前に流れた1つのニュースにある。

「えっと……史上最悪の犯罪者逃亡だったけか？そのせいで休暇中の俺たちまで呼び出されるとはいい迷惑だぜ」

ロサンゼルス市警所属のパトカーの中では、一人の男が今日何度目かの愚痴をつぶやいていた。

「そうは言っても、この状況ですし……人手は多いほうがよいという判断は当然じゃないすか？ ジョージ先輩、愚痴言っても仕方ないですよ？」

「うるせえよソード。からといってわざわざ所轄の全員を出す必要はないじゃないか！」

彼等はそれぞれロサンゼルス市警の巡査部長と巡査である。

ソードは、1年前に所に配属された新人で、配属した時の教育係だ

ったジョージとペアを組んでいた。

「で、その後続報はあったのか？ うっかり寝ちまって無線聞き漏らしちゃったんだが」

「それ、一警官としてどうかと思うっすけど……一応入ってるっすよ。ええと……容疑者は護送車から脱出するさい銃器を奪った可能性が高いという報告と、2時間前に銃器店が強盗にあい、その時の犯人の特徴が容疑者と一致しているらしいっす」

「また、厄介な話だな……銃器を所持してるのはほぼ確実じゃねえか。だいたい何で死刑囚のせた護送車から容疑者がにげんだよ？」

「なんか、飛び出してきたやつを避けようとして事故っただけっす」

「そいつのおかげで、呼び出されたんだから、文句の一つでも言いたいところだぜまったく！」

ジョージの不満ももっともで、彼等を始め休暇中の警官たちのほとんどがたった一つの事件のために呼び出されたのだ不満の一つも言いたくなるわけである。

だがそれは同時に今回の事件の深刻さを物語っている。

「容疑者が容疑者ッすからね……名前はジョン・プレスリー、元アメリカ陸軍特殊部隊に所属。イラク戦争において民間人虐殺容疑をかけられ本土に強制送還され裁判では正当防衛で無罪となったものの軍を退役。その後犯罪に走るようになり、放火、殺人、強盗、

テロ未遂などの事件で名前が挙がるようになり、昨年二月逃亡先のイギリスで国際刑事機構インターポールにより拘束され先週、裁判で死刑が確定し、3日目に留置所から刑務所に移動するための護送車が事故を起こし、脱走。その際に護送車の見張り役の武器などを奪った可能性があり武装の可能性が高いとして、ニューヨーク市警の総員招集令が発令されたとのことっす」

「アメリカ陸軍特殊部隊と言えば俗に言うグリーンベレーって奴か？」  
「そこまでは知らないっすよ。でも軍人崩れっただけですのにやばいと思うっすけどね……………」

ため息をつく2人。しかも軍人だけでもやばいというのにそこにさきほど入った『銃器店が襲われた』という情報である。完全武装した可能性がある元軍人に警察官が太刀打ちできるだろうか？

「まず、死ぬな。数で押せばなんとか抑えられるかもしれんが……………死者出ることは確実だろう。相手が武装していたらの話だが……………」

「そう甘くない気がするっすけどね……………SWATぐらいでないと太刀打ちできないんじゃないすか？」

「どこに出るかわからん相手だ。あらかじめSWATを配置するとはできんしな……………俺たちにできるのはせいぜい撃ちまくって奴の気を引き、その場にとどめておくことぐらいだろうな」

パトカーの後部座席にはベネリM3オートマチック式ショットガンが立てかけてある。（余談だが、ロス市警では2014年現在、レミントンM870かベネリM3のどちらを備えるかは自由とされている）

一警官が持てる銃の中では最大の威力を誇るが、軍人相手のドンパチではこれだけではがちが明かないだろう。

後頼りになるのは、腰にさした拳銃M92Fベレッタだけだ。もともと最近になってグロック17などを持つ者も多い。かくいうソードもグロック拳銃の一つであるグロック21を所持している。

「ソードの奴はわざわざ45口径弾打ち出すタイプの奴を選びやがってさ……こんなもんだたりゃあいだけののによ……」  
「とはジョージのセリフである。」

2人がそろってため息をついた瞬間だった。

「こちらベルナルド！ 7番通りを巡回中に容疑者を発見！ 現在容疑者はバンにのって逃走中！ ナンバーは×××145だ！」

無線から聞こえてきたのはジョージたちの良く知る声だった。

「当たりを引いたのはベルナルドたちか……たしかアイツのペアはハンニバルだったな。お前の同期の」

「ええ、軍事マニアのハンニバルっす。その知識を少しは役立ててくれればいいんすけどね」

「まあ、とりあえず応援に向かおう。7番通りだったな？ あそこならここからそう遠くはない。助太刀にいかんやならん」

お互いうなずきあった2人は7番通りに向けてパトカーを走らせる。



「くそ！ あのバンについてるロゴ、襲われた銃器店のものじゃねえか！ となるとまさか大量の銃火器をあのバンの中に詰め込んでるんじゃないだろうな？」

「その可能性は高いですね。ていうか俺たちが見たときにすでにシヨットガンで武装していましたし」

「ち！厄介な話だぜ！」

容疑者を追跡するパトカーの中で、ベルナルドとハンニバルはじりじりとしていた。

なにしろ容疑者が武装していることは確かなのだ。いつ座席の窓開けて撃ってくるか分からない状況で平然といられるわけがない。いつそのまま逃げ続けてくれればいずれ駆けつける同僚たちやS W A Tたちと連携できるのだが………

「おい、くそ！ 路地に逃げ込みやがった！自分から追い詰められに行くようなもんだぞ？ なんのつもりなんだ」

「誘いこむつもりじゃないですか？ それだけ自信があるってことじゃないですかね」

そんなことを言い合いながら路地に向かった2人の前に、容疑者ジョン・プレスリーが立ち塞がった。その手にはごっついシヨットガン。S P A S 1 2が握られている。

「まずい！降りろ！」ベルナルドの叫びと、銃声が重なった。それと同時にパトカーのフロントガラスが砕け散る。

「くそが！ 問答無用かよ！ 横にコイツを置いて助かったぜ」ベルナルドの手にはM870が握られている。ロス市警の一員となつてから使い続けている愛用のショットガンである。

その横では、ハンニバルが震える手でグロック23を構える。

目の前の警官たちを見て、ジョンは薄く笑った。

「わざわざ追跡御苦労さま。だがそれは無駄に終わるだろう。たかが職業警官が俺を倒せるわけがない。いいか、俺を逮捕できるなんて甘い考えを持つな、殺るつもりで向かってこい。でなきゃおめえらミンチになるぜ？」

不穏な言葉にベルナルドは銃口を即座にジョンに向け引き金を引く。ほぼ同時にハンニバルの拳銃からも銃弾が放たれる。

だが、その銃弾は何もない空間に吸い込まれとっさに移動していたジョンの放った銃弾がパトカーの車体をえぐる。

「まだ、仲間はこのないのか？」孤立無援な上に器量は相手の方が上となると数で押すしかないが、2名だけでは不利すぎる。

「おらおら！ どうしたロス市警の誇りはどこに行った？ この腰ぬけめ！」馬鹿にされ続けるのは腹立たしいがここで挑発にのればアイツの宣言通り一撃でミンチにされるのがおちだと判断し。車体を盾にしながら移動しようとするベルナルドの肩を誰かが叩いた。

「!!」肩を震わせ後ろを振り返るハンニバルはそこに黒いタキシードを着た日本人を見た。

「どうもお困りのようですが、助太刀しましょうか？」

「あ、あんたはいったい？　　というか民間人は危険だ！　　はやくこの場から離れて・・・」

「私は民間人ではありません。　　というか普通なら貴方がたの『敵』と言えるでしょう」

「な？」　「私は日本の『虎狼組』からの使節としてここを訪れた暴力団員です。ですが、その奴にはつい1時間前に友人を殺害されてましてね。協力させてください」

「そんなことできるわけ・・・　　だいたい友人って・・・」

「強盗にあった銃器店の店長ですよ」

ベルナルドの制止を振り切り、男は前に出る。

「あんた一体？」

「さっき言ったでしょう？カズユキ・ヤマモト。しがない暴力団員ですよ」

カズユキはその手にもった鞘から刀を抜く。ジョンがその独特の形状を珍しそうに眺めるのを見ながら和幸は刀を水平に構える。

「私の友を殺めた罪を一生後悔させますよ」

瞬間、滑るようにカズユキの体が前に動いた。その刀が彼の胸を掠め、防弾 防刃兼用チョッキを切り裂く。

「ツッ！」 舌打ちをしてとっさに下がるジョンに再び刀が振り下ろされるが、ジョンはその刀を腰から抜いたサバイバルナイフではじき返す。

「手前、なかなかやりますね」「てめえこそな！」 刀とナイフがぶつかり合い火花を散らす。

そのすさまじい白兵戦をぼーと眺めてしまっていたベルナルドだったが、ハンニバルの叫びが彼を現実に戻した。

「民間人1名がああ2人の近くに！ まるで気づいていないかのように向かっています！ 全身真っ黒のやつです！」

ベルナルドは目を凝らした、確かに白兵戦を繰り広げる2人の近くに黒衣の男性らしき影が動いている。

だが、ここから向かうのでは間に合わない。

だが、その時路地の反対側にパトカーが駆けつけるのが見えた。その座席に座っているのは遠くてよくは見えないが。自分の信頼する同僚、ジョージに見えた。

「頼む！ ジョージ、間に合ってくれ！」

「くそ！ 民間人が巻き込まれちまう！ ソード！ 署に応援を要請しろ！ 俺が民間人を救助する」

ジョージはすさまじく焦っていた、連絡を受けて現場に駆けつけてみればタキシードサムライと容疑者が白兵戦を行っているのに驚かされたが、その場に民間人がいるのは完全に想定外だったからだ。

「おい！ あんた早くこの場を離れ……」ジョージの言葉はそこで切れた、なぜなら彼の体は黒衣の男によって吹きとばされ壁に叩きつけられていたからだ。

「！！」その異常事態に啞然とする男たちの方に黒衣の男はゆっくりと向き直り、次の瞬間男の手から衝撃波のようなものが放たれる。

そこでその場にいた者のうちソードを除くすべてが吹きとばされ意識を失った。

「先輩？ みんな？ いったい……」あまりの異常事態にぼうぜんとするソードに向けて黒衣の男は右手を向ける。次は自分の番だ。そう覚悟してかなわぬまでもせめて一撃でもと銃を向けた瞬間だった。

突如、路地を眩い閃光が包んだ。周り一面が明るい金一色で染め上げられ。同時に黒衣の男の姿がかき消えるように消えた。ソードの意識はそこで途切れた。

その閃光が消えた後、現場には何も残っていなかった。バンもパトカーも。

ジョージ・ライアン、ソード・モーガン、ベルナルド・フォン・フリードリヒ、ハンニバル・ジェファークソン、ジョン・プレスリー、カズユキ・ヤマモト。

この6人は忽然とこの世界から姿を消したのである。

## 異世界での目覚め

「……………ここは、どこだ？」ジョージはぼやけた視界の中に草をはむ、水牛のような生き物を捉えていた。

「……………なんか、のんきに草はんでやがるし……………いい気なもんだこっちは犯罪者と……………ってなあ！？」

一気に視界が開き、がばつと体を起こすジョージ。周りを見渡せ一面の草原。その広い草原のあちこちで水牛が草をはんでいる。普通なら心和むほのぼのとした光景なのだが、今回はそうはいかない。なぜならジョージ達はロサンゼルスの中心部の路地裏にいたはずだからだ。

「気を失っている間に……………ここに運ばれたんか？　だとしてもなぜ草原？　ふつうは病院だろう。確かあの時……………」

あの時、ジョージ、ソード、ベルナルド、ハンニバルの4人の警官たちは逃走中の死刑囚であるジョン・プレスリーを追っていた。そしてジョンと遭遇し銃撃戦に入ったベルナルド・ハンニバル組を援護するためにジョージ達が駆けつけてみるとタキシード姿のアジア系の男が日本刀もってジョンと戦闘してるわ、民間人が入ってくるわで大変なことになり、あわてて民間人を避難させようとしたら急に体が吹き飛ばされそれ以降ジョージは覚えていない。

「くっそが……………とりあえず、なんだかよくわからんが……………ソードの奴を探さんと……………」

ぐらりと草原を見渡してみると、少し離れたところに自分たちが乗ってきたパトカーが斜めになって横たわっておりその近くでソード

が気を失っている。

「あいつは無事だったか……。しかし他の奴らはどうなった？ 周りをもう一度見渡してみるが、自分たち以外の人間はいなさそうだ。まあ、夜に出歩く人間もないだろうが、あれだけの事件に巻き込まれたというのにだれも近くにいないのは不自然な感じがする。」

「うーん……。今日はエイプリル・フルーだったか？ それともドッキリものか……。まあいい、とりあえずソードを起こしてパトカーを元の態勢に戻して本部に抗議してやる」

ぶつくさ文句を言いながら、ジョージはソードを起こすべく50メートルほど前方のソードを起こすべく大股で近づいて行った。

「だめです。うんともすんとも反応がありません。まるで本部が消えてしまったみたい」

「このあたりが、電波が届きにくいところとかじゃないのか？」

「いえ。そうじゃなくて、試しに民間コードで呼びかけても見たんですが。一先反応なしなんです……。これはおかしいですよ」

ジョージとソードは車載無線機の前で深いため息をついた。数分前意識を取り戻したソードにジョージは警察本部への無線連絡を指示し、ただちにソードは連絡を取るため無線連絡をおこなったのだが、まったく応答が返ってこないのだ。

「こうなったら自力で、ロスの署まで戻るしかないな……。ソ



ード、お前の携帯のGPSで今いる場所を割り出してくれ」

「そのことなんすけど……さっきから試してはいるんすけど、こっちもさっぱり使えないんすよ。画面もロス市街の位置情報のまになってますし……」

「どういうことだ？……時計は、夜の10時を指してるし、この時計が狂ってなきゃ俺たちは2時間ほどで、まったく知らない草原に運ばれた計算になるが……ロスの中心部から車で2時間ほどの場所にこんな民家が一軒もないような、しかも水牛が草をはんでるような広い草原ってあったか？」

「少なくとも記憶にはないっすね……まあ、それはそれとして無線が通じないとすると、直接車でロスへのアクセスを探すしかないっすね。すこし行けばたぶん民家も見つかると思います」

「まあ、それが一番確実か……よし運転は俺がやる。お前の方が視力がいいからな、民家の明かりが見えたらすぐ知らせろ！」

ジョージとライアンの2人はパトカーに盛り込み点滅灯をつけ、走り出す。

そんな2人から少し離れた場所、枯れ果てた大木の傍に軽装の鎧も身に付け、黒い兜をかぶった一団がいた。その先頭に立つ男は構えていた『双眼鏡』を下し、ぽつりとつぶやいた。

「やつら……まさか天下人か？　だとしたらこれは一大事になるぞ……」男は腰から取り出した『無線機』に静かに告げる。

「長老議会本部。こちら『ドス』隊長　ゴードン。エラム平原にて、

所属不明の男達を発見。至急調査の必要あり。長老議會より、至急軍統括部に部隊派遣要請を、対象は天下人の可能性があり。繰り返し、対象は天下人の可能性があり」

## 異世界での目覚め（後書き）

話は短いです。ごめんなさい。

これからがんばりますので！

## 異世界の怪物 獣神

「行けども行けども牛ばかり……民家の一軒も見えやしない……どうなってるんだハンニバル！」

「そう怒鳴られても……でも確におかしいですね。これだけ走っていて民家はおろか電柱1本見えないなんて……」

「ああ、おかしすぎる……本当にどうなってるんだ？」

広々とした草原、その中を疾駆するパトカーの中でベルナルドとハンニバルはため息をついていた。目が覚めて、パトカーで署に戻るために走り続けて2時間、どこまでいっても一向に変わらない風景に、2人のいらだちは頂点に達し始めていた。

「ソードやジョン先輩の行方もつかめてませんし……死刑囚プレスリーのことも……」

「そこが問題なんだよな……せっかく捕捉したのに逃げられたか、それとも捕まったのか……それすら分からない……」

ベルナルドは頭を抱えて重いため息をつく。

「とりあえず、民家の一つでも見つからんと……ん？」

前方200メートルほど先、そこにわずかに光が見える。赤々しい光はおそらく焚き火でもやっているのだろう。そうベルナルドは判断した。

「ハンニバル！ 前方200m先、明かりがあるぞ！」ガバツと伏せていた顔をあげて（どういうわけか上司であるベルナルドに運転させていた）ハンニバルは前方を見つめる。

真っ赤な光に照らしだされ、無数の民家があるのが見てとれる。どうやら小さな集落のようだ。

「本当ですね！ とりあえず、あそこまで行って電話借りましょうよ！」

「そうだな、もう少し近くまでいってからお前が降りて、誰かに電話借りてこい」

パトカーは一路、前方に見える集落へ向けて突き進む。

「……………こりゃあ……………どうなってるんだ？」ハンニバルは目の前に広がる光景に唖然としていた。ハンニバルが佇むのは、光の出所、村の中心の広場らしき場所だ。いや、だったというべきかもしれない。なぜならすでにここは村ではなくなっていたからだ。

元々は石造りの建物だったろう、一戸建ての民家の残骸は重機で解体されたかのように根本から崩され倒れていたり、屋根が吹き飛んでいたたり、家の外壁に穴があいていたりとすさまじい状態になっている。

「すでにゴーストタウンで解体寸前でした……………みたいなオチでもなさそうだな……………まだ広場の焚き火はついてるし……………つてあれ？」

広場に近い木造りのやぐらのような建物の傍に横たわる少女がいた。ぐったりしているが体が小刻みに震えているところを見る限り、死んではいないようだ。

「生存者か！ いやそれとも迷子？ なんにせよ警察官の僕の仕事だ！」

ハンニバルは一直線に少女にかけよりその体を揺すって声をかける。

「大丈夫！？　しっかりして！」　「う…　う～ん……………　っ！　誰！　」　少女は大きく目を見開いて、目の前のハンニバルを見つめた。その瞳に宿るのは警戒の光。

「僕の名前はハンニバル。ロス市警の警官だよ。いつたいなにがあったの？」

「ケーサツ？ それってなに？ 人類軍の新しい部隊の名前？」

予想もしなかった返答に戸惑うハンニバルにお構いなしで少女は続ける。

「よく分からないけど助けて！ 村はヤツに襲われたの！ 父さんも母さんも、ミラもレイもみんな……アイツに……」

「……アイツって？」

「後で話すから今は早くここから離れて！　そうじゃなきゃまたアイツが……」

刹那、地面を揺さぶるような衝撃が2人を襲った。

「な！？　これは？」

「来ちゃった……………」

少女は呆然とハンニバルの後ろを眺めている。

「来たってなにが……………」

「分からないの！？　後ろに来てるのに！」

ギョツとして後ろを振り返るハンニバルの眼に映るのは、巨大な2本の牙を口元からはやし、両手で巨大な両刃の斧を構える巨漢の怪物。

「なんだよ…………　こいつは！」　「こいつは獣神…………　四大勢力の一角に所属する荒くれ者…………　徘徊獣『ゴモス』！」　少女の叫びに答えるかのようにゴモスが斧を振り上げ雄たけびを上げる。慌てて腰のホルスターから拳銃を抜くハンニバルに向けて巨大な斧が振り下ろされた。

## 異世界の怪物 獣神（後書き）

毎回短いのが申し訳ないです．．．．．

今回でようやく主人公たちが異世界と関わり始めました。

さて、ここから現実世界の警官たち対ファンタジー世界を代表する  
ような巨漢化物との闘いがスタートする．．．．．と思います  
（汗）楽しみしててください。



## 怪物との戦い 特殊部隊の介入

「遅いな……。ハンニバルの奴なにやってんだ？」車内でひたすら待ち続けるベルナルドの怒りは我慢の限界をとうに通り越して一周した感じにまでなっていた。

苛立ちながら、いいかげんハンニバルを呼びに行こうと、ドアに手をかけた時胸元の無線機からハンニバルのどなり声が聞こえてきた。

「こちらハンニバル！ 村は完全にぶっ壊されてて生存者は少女1人のみ！ おまけに怪物がいきなり現れて……とにかく早くパトカーで来てください！ こっちはただいま怪物と交戦中！」

モンスター

こいつ、イカレタか？と一瞬思ったベルナルドだがすぐにその考えを否定した。なぜならハンニバルからの無線の直後、目の前の村でひととき目立つ木造りのやぐらのような建物が吹っ飛んできてパトカーの傍に突き刺さったからだ。

「くわしいことは分からないが……」ベルナルドは股の間に挟んでいるレミントンM870ショットガンを握りしめる。

「とりあえず、まともな状況じゃなさそうだな」アクセルを勢い良く踏み込んだベルナルドを乗せたパトカーが意外に遠い村の中心に向けて走り出す。

「くそ、くそ、くそ、くそ、くそ！」最初のゴモスの一撃をなんとか、かわし、右手にもったグロック拳銃を連射するハンニバルだが目の前の怪物、ゴモスはひるみもしない。唸り声をあげて再び斧

を振り上げる。

「うおおおお！！」少女を左手でつかみ上げて右にタックルをかますかのような勢いで転がるハンニバルは先ほどと同様にゴモスの攻撃をよけた。

ゴモスの攻撃のパワーは強力だが、その動きはそれほど速くはないことをハンニバルは感じ始めていた。

目標を外したゴモスの斧が地面に激突し、地響きを感じさせるような衝撃が2人を襲う。

「ぐわあ！？」「衝撃におもわず体を飛ばされてしまったハンニバルはうつかりつかんでいた少女を離してしまった。

その少女はゴモスの真ん前に着地している。

「しまっ！？」「慌てて駆け寄ろうとするハンニバル。その前でゴモスの大きく毛むくじやらの腕が少女に向けて伸ばされていく。その時だった。

空を切り裂くようなサイレン音が突如聞こえてきた。ゴモスは伸ばしかけた腕をとめ、音の聞こえてくる方向に首を回す。その先にいるのは……

「よう！ファンタジー世界の住人みたいな怪物さんよ！仲間と少女を救うためのヒーローの参上だ！悪役は悪役らしく素直に倒れてくれよ？」

すさまじい速度でサイレンを鳴らしながら突っ込んでくるパトカー

を見て、一瞬、動きを止めたゴモス。そのすきにハンニバルは少女を突き飛ばしゴモスの視界から強引外すと同時にその右手にもつ拳銃の銃口をゴモスに向ける。

「おい！怪物！」モンスターハンニバルの叫びに顔をこちらに戻したゴモスの視界にハンニバルの手に握られる黒光りする拳銃が映る。

「さすがに目ん玉はやわらかいよな？」次の瞬間、ゴモスの右目をハンニバルの放った9ミリ弾がつぶした。

天を震わせるような雄たけびを上げ、よろめくゴモス。その健在な左目で自分の目をつぶした犯人を捜し出そうとするが、その眼に映るのはこちらに向けて突っ込んでくるパトカー。

「よーし……そろそろだな……いっけえ！」パトカーを操縦していたベルナルドは怪物がこちらを向いて斧を振り上げ始めたのを見て、アクセルに重しを乗せて運転席から飛び降りた。そして腰からベレッタM92拳銃をぬき、慎重に狙いを定める。

新人のくせに射撃の天才とまで呼ばれるソードには及ばないが、ベルナルドもまた射撃の腕は一流だった。その彼が狙うのはわざと開けておいた給油口。

ゴモスはいよいよ高々と斧を掲げ一気に振り下ろそうと力を込める。

「ファイア！」

ベルナルドの拳銃から放たれた弾が給油口に命中するのと、斧が車体に食い込むのとほぼ同時だった。刹那、ゴモスの体は巨大な炎に包まれた。

「グウオオオオオオ！」すさまじい断末魔の叫びと共にゴモスの体が膝から崩れ落ちるように地に倒れていく。

拳銃弾さえ苦にもしないゴモスに唯一ある弱点。それは火だったのだ。

「ふう……アシはなくしちゃったがとりあえず危機は回避できたか……おい！ハンニバル！大丈夫だったか！」

ハンニバルは拳銃弾をゴモスの右目にブチ込んだあと、脇に飛ばした少女を抱えてゴモスからできるだけ遠くへ逃げるために全力疾走していた。

そのため、ベルナルドのすぐそばまで駆け寄ってきていた。

「大丈夫です！ この子も無事です！ でも、けっきょくここがどこか、アイツはなにかとか、大事なことがさっぱりわかりません」

少女は突き飛ばされた時の衝撃で気絶しており、事情をきくことができない。おまけに怪物を倒すためとはいえ、貴重な車両を失ってしまった。

「しかたない。こうなりゃ徒歩で行くしかないな。ハンニバルはその子を背負って……」それ以上ベルナルドの言葉が続くことはなかった。突然首元に剣のようなものが当てられ動きを止められる。さらに目の前のハンニバルの喉元にもナイフのようなものが後ろから当てられていた。

突然の事態に混乱する2人の頭に突然殴りつけらような衝撃が走り、2人の意識は急速に闇の中に沈んでいった。

「こちら『ドス』第一分隊。目標搜索中に新たな所属不明者を発見。ゴモスとの交戦を確認。少女を守りながらの交戦で2人で1体を倒した。我々が追う目標と同一の種類の可能性を考え拘束しました」

「よし。こちら『ドス』総隊長ゴードン。私の全権限をもって命じる。目標追跡は一時中断。第一分隊が拘束した2人をただちに中央都市に移送しろ」

## 廃墟の村 ウサ耳女

「……………なあ、こいつは何だと思う？」  
「怪物としモンスターか言いようがないっスね」

廃墟と化した民家が立ち並ぶ小さな集落。その中央に位置する広場でジョンとソードは目の前に横たわる黒焦げた異形の死体を前に啞然としていた。

署に戻るべく車を走らせること4時間弱、走りに走っていい加減イライラが限界へと達しかけていたときに村らしきものを見つけ、電話を借りようと入口に向かったのだが……………

「村には人っ子一人おらず、広場に行ってみたらぶっ壊れたパトカーに黒焦げになった怪物の死体とご対面……………ってどう考えればよい？」

「2つ考えられるッす。1つはこのパトカーのナンバーはハンニバルたちが乗っていたやつだから2人が子の化物と遭遇していた可能性があるってこと。もう1つは給油口が開けられているところから見て

何らかの原因で開いた給油口から漏れ出したガソリンが引火してこの怪物を燃やしたかもしれないってことッす。まあ予想でしかないすけど……………」

すでに朝日が広場を照らしはじめていた。2人は夜通し走り続けていたことになる。

「ハンニバルたちは、多分徒歩でこの場を離れたとは思うんすけど、

「……どこに行ったかはつかめないすよね……」

「だな……」

顔を合わせてため息をつく2人。

その時、2人の前に突如、人影が舞い降りた。

「!？」」同時に驚き、そしてほぼ同時に腰の拳銃に手を伸ばす2人。

「覚悟！」突如舞い降りた影が腰に手を伸ばす。要所要所を軽装の鎧で守り、顔には軽量のかぶとを付ける影は女の声を発した。だがそれよりも2人を驚かせたのは女のかぶとから飛び出る2本の耳。いやウサ耳だった。

「おいおい！何だってんだよこいつは！」拳銃を構え、ウサ耳女に瞬間的に向けるソード。だがこちらも一挙動で剣を抜いたウサ耳女は剣をまっすぐソードに向けて振り下ろす。

しかし、女の剣がソードの体を切り裂くことはなかった。

ギイン！という甲高い音とともにウサ耳女の剣をジョージの特殊警棒が防ぐ。

「おいおい、この手ごたえ真剣かよ？マジでいかれたクレイジーガールだぜ。お前、名は？」

「きさまら人類に名乗る名などもたない！」「？なんの話だ？」

「何をとぼけている！ 我ら獣神と人類は仇敵どうし。それを知らないとでもいうつもりか！」

怒りともに振るわれる剣を後ろに飛びのき避けるジョージ。

「あゝ．．．．．何と言えがいいか．．．．．とにかく俺たちは獣神とか人類といわれても本気でさっぱり分からないのだが？」

ウサ耳女は拍子抜けしたような顔でジョージたちをみた。

「．．．．．本当に何も知らんのか？ 蜥蜴一族や闇一族たちのことも？」

「知らない、全く知らん。というかいったいどうなっているのか解説がほしいぐらいなんだが．．．．．」



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9372q/>

---

ワールド・オブ・ザ・ダイ

2011年10月7日01時59分発行